

仮名文字ブームの到来を夢見て

赤川 薫
あかがわ かおる

(かなアーティスト・平7文)

「ひらがなじゃなくて、漢字を教えてもらいたい」。ある日、ベルリンでドイツ人の生徒に言われた。漢字に比べて日本独自の文字であるひらがなは「かっこよくない」という。悔しかった。

平安時代以降、宮中や武家の多くの女性が用いた仮名文字は、源氏物語や枕草子を記すのに使われた。日本文化の神髄だが、その存在感のなさと国際競争力の低さを思い知らされた。どうすれば、その繊細さや曲線美を分かってもらえるのだろうか。翌日から試行錯誤が始まった。

まずはドイツ人でも感情移入できる和歌や俳句の横に墨絵を添えてギャラリイに持ち込んでみた。「アートではなく、所詮アジアの文化」。反応は冷たく、門前払いを受けた。

行き詰まったとき、ふと幼い頃、米ニューヨークで見た芸術家スーラの点描画

を思い出した。「点で絵が描けるのなら、文字でも描ける」。

それで生まれたのが仮名文字の濃淡で絵や模様を浮き彫りにするモダンアートの「Kana de l'Art (かなでるアート)」と名付けて商標登録し、創作活動を始めた。

ようやく効果が見え始めた。伝統的な書道作品を並べても日本ファン以外は関心を示さなかったが、文字で絵を描いたとたんじつくりと眺めるようになった。「メルセデス・ベンツ」が運営するオンライン誌からは「尊敬するアーティスト」として取材を受け、個展を開けばドイツの新聞も話を聞きに来てくれるようになった。

初心は忘れていない。個展は講演とセットにし、仮名文字の歴史を説明する。「仮名こそ日本文化だということがわかった」。ドイツ・ジークブルク市立美術館での講演後、白髪の男性の言葉に涙が出そうになった。

残念なのは肝心の日本でも仮名文字への関心が薄れていること。江戸時代は数百もあったが、一九〇〇年に明治政府が五十文字だけを「ひらがな」として学校で教えることと決め、残りを「変体仮名」に

区分して教育現場から外した。

当時、日本で最初の近代国語辞典「言海」が「ひらがな五十音」の順に編纂されているのを見た福澤諭吉先生が顔をしかめたという。五十音順が定着するはずがないと。その予想に反し、いまだ仮名文字は蕎麦屋の看板などでしか見あたらない。このままでは存在を知らない人が増えるばかりだ。

日本でも仮名文字の普及に取り組みことが次の課題。慶應で培われた「独立自尊」の精神を糧にする私を、福澤先生はどう見てくださるだろうか。



Kana de l'Art® : 赤川薫
題：資本主義